Let's ESD!　Kitakyushu ESD Council News Letter

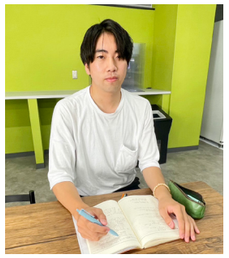
未来パレットだより

August 2023
vol.34
2023年8月15日発行
北九州ESD協議会

ESDとは、「持続可能な開発のための教育」を意味する英語 Education for Sustainable Development の頭文字をとったものです。

北九州市における環境学習の意義

北九州市はなぜ「環境首都」と言われるの？旦過復興は今？ わたしたちの知っているようで知らない街のこれまでとこれからを学生たちの視点でみつめてみました。



北九州市立大学２年
園田さん

これを読んでくださっている方の中に、北九州市は「環境首都」であることを知っている方はどれほどいらっしゃるでしょうか。また、北九州市が「環境首都」であることは知っていても、なぜそう呼ばれるようになったのかその経緯については知らないという人も多いのではないでしょうか。今回はそんな北九州市の環境面について、これまでとこれからのまちづくりの観点を踏まえつつ、北九州市環境局環境学習課の方にお話を伺うことができました。環境学習課は幅広い年齢層に向けて、北九州市における環境学習の普及に努めておられます。その一つのツールとなっているのが「北九州市環境首都検定」です。

北九州市環境局環境学習課
有田課長

環境首都検定とは、世界の環境首都を目指す北九州市の取り組みや魅力について再発見し、実践的な環境行動につながるきっかけづくりとして開催されるご当地検定で、昨年度で 15 回目の開催となったそうです。昨年度は 12 月上旬に開催され、5,700 名を超える方々が受検されたそうです。この環境首都検定は、幅広い層の方々に受検してもらうために、たくさんの工夫をしています。会場に行かなくても受検できるように、全ての受検区分でオンライン受検が可能になりました。また、若者の環境学習の機会を増やすために「中高生編」という受検区分を追加したそうです。市をあげて世界の環境首都を目指す北九州市の取り組みに、皆さんもぜひ挑戦してみませんか？

次に「環境首都」の成り立ちについてお伺いしました。

北九州市では、1960 年代からの公害克服をはじめとして 1980 年代からの環境国際協力、1990 年代からの資源循環型社会の対応という政策が国内外から評価され始めた頃に「今後の北九州市の地域ブランドは何か」という課題が上がりました。

そこで、環境という分野を住み良い暮らしづくりの１番の観点として掲げられたのが「世界の環境首都」だったのです。2004 年には市民・NPO・企業・大学などの多種多様なフィールドで活動する人々が参加する「環境首都創造会議」が設置され、そこでの意見を集約し「“真の豊かさ”にあふれるまちを創り、未来の世代に引き継ぐ」という基本理念のもと、「環境首都グランドデザイン」が策定されたそうです。

取材をしている園田さん

最後に、環境学習課が環境課ではなく環境“学習”課であることの意味についてお伺いしました。「環境学習」という言葉自体は環境基本法に明記されており、一般的にも知られているそうです。しかし“北九州市における「環境学習」”には特別な意味合いを感じておられます。それは北九州市での公害克服において、最も重要な役割を果たしたのが「市民（婦人会）による調査研究活動」だったからです。この活動は「世界の課題を、自ら問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす」といった SDGs や ESD の概念を先取りしていたもので、環境課ではなくあえて環境学習課とした理由は、その「自ら学び課題に取り組んできた」北九州市民の歴史と気質を北九州市のアイデンティティとして内外に示すためではないかと語ってくださいました。

この環境学習課が今、次の世代に求めていることは、若者ならではの視点と行動力で、さらに次の世代へ環境学習を促進することだそうです。

私も北九州市に住む一人の学生として、今後も「北九州市の環境について」自らも勉強しながら次の世代に伝えていきたいと思います。

参考：北九州市 HP 令和４年度　北九州市環境首都検定について
（北九州市立大学　２年　園田和希）

企業訪問　～伝統を紡ぎ、これからの未来へ～

株式会社 小倉縞縞を訪問して

みなさんは、江戸から昭和初期にかけて全国に広まった小倉織を知っていますか？ 小倉の伝統的な織物である小倉織は、今も進化を続け伝承されています。そんな小倉織に現代的なテイストを加えたデザインや持続可能な社会を目指していくための商品開発により小倉織伝承の立役者となっているのが小倉縞縞です。また、昨年度の「北九州 SDGs 未来都市アワード」で SDGs 大賞を受賞され、未来都市としての北九州市を牽引する原動力となっている企業です。今回、そんな小倉縞縞に取材を行い、代表取締役である渡部英子様の思いや今後の展望など大変貴重なお話をお聞きすることができました。

江戸時代から 400 年以上の歴史を持つ小倉織。明治時代には「霜降り」と呼ばれる通常の小倉織とは異なる織り方をした生地が学生服にも使用され、全国的にも人気を博したため、全国に生産地を持つことになりました。しかし時代の流れの中で、昭和初期に小倉織は一度途絶えてしまったのです。そんな小倉織を今の形に進化したのが小倉縞縞です。小倉縞縞が目指すものは、世界に通じるテキスタイルです。そして、なぜ伝統ある小倉織に SDGs を取り入れたのか伺いました。渡部様は、「他の生地にはない小倉織の良さは、その強度にある」と語って下さいました。その強度ゆえに使い捨てにすることなく、経年変化も楽しむことができる優れものの小倉織。これが小倉織に SDGs を取り入れた所以だそうです。SDGs の 17 の目標をデザインに取り入れた関連商品には、小倉織の“フラッグ” となってほしいという渡部様の思いが込められています。さらに小倉縞縞は、海の漂着ごみが原料の再生ポリエステルからなる糸を使用した「縞縞 EARTH」も手がけています。循環する糸の持続可能性と小倉織の特性を掛け合わせて、豊かな森と雄大な海を表現しています。

今回の取材では、併設されている小倉織の工場も特別に見学させていただきました。精巧な小倉織は現代では機械織でも生産されています。しかしその前提として、糸を手で結ぶなど、高密度な小倉織の質を保つために、細かな部分の手作業が多くあります。伝統と革新の技術により、今の小倉織があります。もう二度とこの伝統を途絶えさせないために、自分たちで工場を持続させることの大切さが伝わってきました。

最後に、渡部様に小倉織の今後についてお聞きしました。渡部様は、まずは小倉織がこれからも存続していくことが最低限のことであるとお話されました。その中で、ただの織物ではなくインテリアやオブジェクトに加工し、海外へ展開するなどして、これまでよりも小倉織を広めていきたいと語ってくださいました。これからの小倉織に注目していきたいと思います。みなさんも、北九州の伝統工芸である小倉織をぜひ手にしてみませんか。

（北九州市立大学２年　園田和希　田口大翔）

協議会の運営体制が変わりました！

ESD の推進を図り、協議会の運営を再構築するために、これまでの運営委員会を３つの委員会に分け、その目的を次の通り設定しました。

①活動委員会
ESD に取り組む組織間の情報発信及び交流を図り、主体的な活動の促進を行うために、広く会員の意見を把握し、会員相互の活動の促進を図る。

②未来創造委員会
持続可能な社会づくりの主役となる次世代が主体となって、多世代との多様な連携を目指すために、ESD に関する各種事業の促進を図る。

③合同委員会
ESD に取り組む事業運営について、会員の意見を代表し、必要に応じて調整・協議を行い、役員会を経て総会に諮る。

編集後記

今回の特集「北九州の街を見つめる」いかがでしたか？今回の取材はすべて大学生の皆さんの若々しい感性で街の良さを再発見してくれました。新しい市長さんの元で北九州市がさらに飛翔することを願いながら「環境首都」を牽引してきた ESD 協議会として、これからもしっかり街を見つめていきたいと思います。　（ブランディング部会 リーダー　原賀いずみ）

ESD 未来パレット 北九州ESD協議会
事務局
〒802-0006　北九州市小倉北区魚町3丁目3-20　中屋ビル地下1階
電話・FAX (093)531-5011
E-mail：k-esd@k-esd.jp　URL：https://www.k-esd.jp

発行：北九州ESD協議会 事務局
編集：北九州ESD協議会ブランディングプロジェクト

無断転載を禁じます
Copyright © 2007 Kitakyushu ESD Council
All Rights Reserved.

この未来パレットはタカミヤ・マリバー環境保護財団のご協力により制作されています。

旦過復興のために

旦過市場とは…「旦過」という言葉の由来には、２つの説があるそうです。1632 年（寛永９年）、小笠原忠真公が小倉に移った時に、雲水（旅の僧）の宿泊所がつくられ旦過寮と呼んだ事が一つ目の由来です。もう一つの由来は、宿泊した雲水達が旦（あした / 朝早く）に旅立ったことから、旦過という地名が名付けられたとされています。現在の旦過市場は大正時代のはじめ、隣接する神獄川を昇る船が荷をあげ商売を始めたことから始まる由緒ある市場なのです。

（旦過 HP より）

建設局河川部神獄川旦過地区のまちづくり支援係長が語る!!

取材担当　船井さんと田口さん

旦過入口（魚町銀天街から見た旦過市場）

旦過市場での２度の火災から１年、「奇跡の市場」と呼ばれるほどの復興の姿を見せている旦過市場のこれまでの軌跡について、北九州市建設局河川部神獄川旦過地区整備室まちづくり支援係長の山本さんにお話をお聞きしました。整備室の旦過市場、旦過の方々に対する想いは強く、お話を聞いていく中で旦過への愛がひしひしと伝わってきました。小倉の商業核として、魚町銀天街とともに発展してきた旦過市場は、大正から続く市場であり市民の手によって受け継がれ、にぎわいを創出してきたことが分かりました。２度の火災により一時は元気がなくなった市場がにぎわいを取り戻した要因は、市民と旦過市場の方々、北九州市の固い繋がりでした。 ハード面やソフト面での復興を北九州市だけで目指すことは難しく、旦過市場の方々と 100 回以上に及ぶ協議を行い、市民の方々の思いを汲み取り尊重することでここまでの復興がなされていると感じました。官民が協力して、復興の体制を整え、ガレキの撤去など復興に向けた多くの課題を一つ一つ、協議・検討・実行し解決していったそうです。これは、市民と旦過市場の方々、北九州市の目的や思いが１つになり、助け合ってきたからこその成果だと思います。１年でここまでの復興を見せている旦過市場ですが、火災被害前のにぎわいを取り戻すために様々な取り組みがされていました。 その中の1つに仮設店舗「旦過青空市場」の整備がありました。「旦過青空市場」という名称は、施設を建てた北九州市ではなく、旦過市場の方々と市民（足を運んでくださるお客様）の投票によって決められたそうです。ここには、これから 100 年の旦過市場をつくる人である「旦過市場の方々、そして市民（お客様）の思いを尊重したい、そして愛着を持って、これからの 100 年に旦過市場を繋いでほしい。」という北九州市の熱い思いが込められていました。他にも旦過市場の新たな魅力を作るワークショップ「一緒にタンガレンガ広場を創ろう !!」や「タンガリボンフェス～約束と絆の感謝祭～」などのイベント開催も行っていました。その日だけの単発のイベントにならず、これからに繋がるお客様との繋がりを意識し、継続していく強い意志を感じました。

青空市場の入口

私たちは今回の取材を通して、旦過市場という存在の大きさ、市民から愛されてきた歴史、人情味あふれる旦過の雰囲気を感じることができました。そして、そんな旦過市場を次世代に継承するためのまちづくりを学ぶことができました。

青空市場の幕が道路から見えるようになっている

メイン通り入口上部には旦過地区復旧対策会議の垂れ幕が飾られている

（北九州市立大学２年　田口大翔・船井朱梨）

ブランディング コミュニティ

北九州市で若者を支え、海外へつなぐマハキタさん！

株式会社 Mahal.KitaQ　磯村 加奈子様

取材担当
屋敷さん

皆さんは北九州市で頑張っている若者の団体である、「Mahal.KitaQ（マハルキタキュー）」をご存じですか？　Mahal.KitaQ（通称マハキタ）さんは、主に学生の海外留学を支援しているベンチャー企業で、その他にも学生向けのキャリア支援などにも力を入れて、若者に焦点をあてた取り組みをしている団体です。今回はマハキタで総務マネージャーをしていらっしゃる磯村加奈子様にお話を伺いました！

私が取材していく中で一番印象に残ったことは「マハキタに来る若者にとって、マハキタはどのようなコミュニティになっているのか」とお聞きした際に、「変わろうと思っている人にきっかけをあげる場所」とおっしゃった言葉です。自分自身も大学生になり、何か始めたいけど何をしていいか分からない、自分がやりたいことが分からない、という人が自分だけではなく周りにも意外とたくさんいると感じています。マハキタの活動は、そんな若者にとって、自分の成長につながる場所になっているのだろうと思いました。また、ちょっとした日々の悩みや、自分の将来についてなど、いろんなことをサポートしている点がとても印象に残りました。

これからの時代を切り開いていく若者の皆さん、「変わりたい」と思った時があなたのターニングポイントです。ぜひマハキタに行って、自分を変えるきっかけをつかみましょう！

＊まなびとで良くミーティングや活動をしています。ココにくるとお話しできるかもしれませんよ！

（北九州市立大学１年　屋敷佳歩）

認知症と向き合い寄り添う活動

NPO 法人　老いを支える北九州家族の会　森山 秀文様

取材担当
前田さん

「NPO 法人　老いを支える北九州家族の会」は、認知症の方の声や介護者家族の声を大事にする視点から「認知症の人のためのケアマネジメント」の活動を約 30 年にわたり取り組んでいます。戸畑支部で支部長として活動されている森山秀文様は、この会で活動する際に一番大切にしている思いは「認知症の方の尊厳を守ること」と語っています。森山さんは「認知症の方を認知症の患者として見ずに、一人の人として寄り添う姿勢が大切」とお話されました。月に一度行われている認知症の方や介護者家族のための交流会に加え、コールセンターの運営、認知症当事者の方による講演会など様々な取り組みを行っています。また、９月 26 日（火）･27 日（水）･28 日（木）には、小倉駅ジャム広場にて作品展示会のイベントを実施する予定です。森山さんは「これからも、認知症の方や介護されている方の心に寄り添うことのできる居場所として活動を続けていきたい」と笑顔でお話されました。

（北九州市立大学１年　前田心那）

北九州市の救世主　「きぼうのまちプロジェクト」

認定 NPO 法人抱樸　専務理事　森松 長生様

取材担当
藤原さん

認定 NPO 法人抱樸の「樸」は、「原樸＝ありのままの姿」を抱くという意味が込められています。 団体を設立したころは社会に受け入れられず、苦しい状態が続きましたが諦めず、困窮者をゼロにしたい！その一心で活動を継続したそうです。また、抱樸が 27 もの幅広い支援を行っている理由は、困窮者が求めている願いをすべて叶えようとしたからだそうです。ホームレスの人にご飯を与えることが支援ではなく、ホームレスの人が家に住めて、働いて、そして自立して社会に復帰する。その最終型まで、寄り添い続けておられます。森松理事長から聞いた自立の本当の意味には「多くの人に少しずつ頼れるようになる」こと。どんなに有能な人でも、一人ですべてをすることは不可能です。だから、人に頼ったり、甘えたりするのは悪いことではなく、それも自立の一歩だと言うことに驚きました。 そして、現在取り組んでいる「希望のまちプロジェクト」の建設場所は元暴力団の事務所でした。あえてそこに建てることで、北九州市は現在希望に満ち溢れているということを強調しています。初めは、救護施設という1面だけの予定でしたが、子どものための場所、そして障がいのある方の場所といった多くの人のニーズに沿った場所へと変貌を遂げています。誰にとってもアットホームな居場所、それこそが「希望のまち」なのです。 最後に、抱樸のこの言葉を贈ります。「わたしがいる　あなたがいる　なんとかなる」

（北九州市立大学１年　藤原高士）